

価値観研究プロジェクト

Value Study Project

今年度は新入生リトリート（5月13－14日）で、新入生を対象に質問紙（第1部：「13の生き方」質問紙、第2部：自由記述）調査を施行した。上記のデータ分析し、第23回日本達心理学大会論文集に投稿し、2012年3月11日（日）に名古屋国際会議場にてポスター発表を行う予定である。

大井直子・栗山容子：大学生の価値志向（7）価値志向の時代的変遷

栗山容子・大井直子：大学生の価値志向（8）自由記述の分析

上記の研究の概要を述べると、「価値志向の時代的変遷」では、今年度の新入生361名と4月入学1年生の60年代は1078名、90年代は305名、2000年代は506名とを比較した。全調査者2250名の13項目に対する評定得点をもとに項目間の相関マトリックスを求め主因子解を求めた後、プロマックス回転を施し4因子を抽出し、各因子の主要項目を加算し平均した価値志向得点を算出した（表1）。

表1 各年代における各価値志向得点の平均値と標準偏差

年代	「慈愛奉仕」		「内面生活」		「積極行動」		「安楽多彩」	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1960	4.80	0.83	3.11	0.88	4.11	0.89	4.65	1.09
1990	4.26	0.91	3.07	0.92	4.05	0.99	5.57	0.97
2000	4.16	0.88	3.33	0.94	4.02	0.93	5.17	1.03
2010	4.33	0.80	3.63	0.98	4.21	0.89	5.39	1.01

年代差を検討するため分散分析を行ったところ、第1因子「慈愛奉仕」（図1）では、主効果が見られ（ $F(3,2246) = 83.53, p < .001$ ）、多重比較の結果、60年代は90年代、2000年代および2010年代より0.1%水準で有意に高く、2010年代は2000年代より5%水準で有意に高かった。

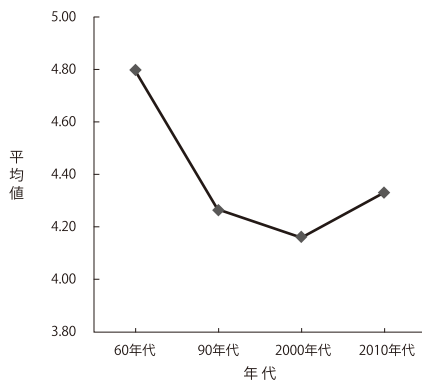


図1 各年代の「慈愛奉仕」得点

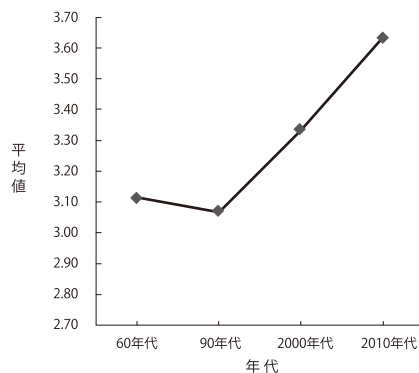


図2 各年代の「内面生活」得点

第II因子「内面生活」（図2）にも主効果が見られ（ $F(3,2249) = 33.73, p < .001$ ）、2010年代は60年代、90年代および2000年代より0.1%水準で有意に高く、2000年代は60年代および90年代より

0.1%水準で有意に高かった。第III因子「積極行動」(図3)でも主効果が見られ ($F(3,2248) = 3.43, p < .05$), 2010年代は2000年代より5%水準で有意に高かった。

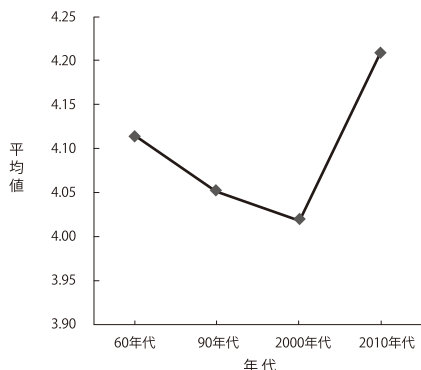


図3 各年代の「積極行動」得点

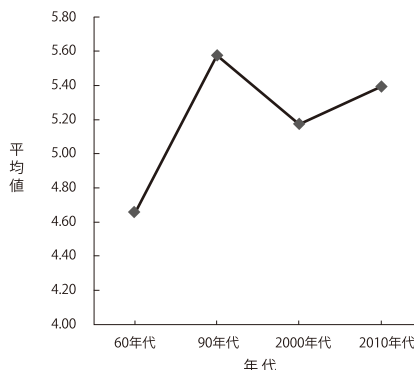


図4 各年代の「安楽多彩」得点

第IV因子「安楽多彩」(図4)でも主効果が見られ ($F(3,2251) = 90.97, p < .001$), 60年代は90年代, 2000年代および2010年代よりも0.1%水準で有意に低く, 90年代は2000年代よりも0.1%水準で有意に高く, 2010年代は2000年代より5%水準で有意に高かった。

2010年代は大震災後の5月中旬に調査されたもので, これまでの傾向とはかなり異なった様相を呈している。例えば, 60年代から2000年代まで時代ともに低くなっていた「他者に奉仕するキリスト教的価値志向」は, 2010年代は少し高くなっていた。「内面的精神生活を重要視し現実から逃避する価値志向」は, バブル崩壊を経験した2000年代で大きく高くなったが, 今回は更に高くなっている。「仲間と協同して積極的行動をする価値志向」は, 60年代から2000年代まで徐々に下がっていたが, 今回は大きく上昇した。「安楽を求め柔軟で多元的生き方を好む傾向」は, 60年代から90年代に急激に高くなったが2000年代には低くなり今回は高くなっていた。大震災後の「頑張ろう, 日本」や「絆」という社会的モラルが, 新入生の価値志向に大きく影響していることが窺えた。

次に, 自由記述による質問紙の回答から大学新入生の価値志向を検討した。栗山・大井(2008, 2009)は面接によって価値志向と職業的価値志向の概念的構造化を試みたが, 記述によっても同じ価値構造が得られるかどうかを検討した。大学新入生の回答のうち, 本分析では任意の160名を分析対象とした。

質問1. 「生きていく上で一番大切だと感じられることはどのようなことか。なぜそう思うか」
 2. 「大学では何を学びたいか。なぜか」
 3. 「将来どのような仕事をしたいか」
 4. 「現時点で職業に就くということをどのように考えているか」のうち, 1. と4. の回答(B5紙に2問のスペース)を分析対象とした。記述文を最小の意味内容に分割し, 栗山・大井(2008)の8価値パターンと栗山・大井(2009)の職業的価値志向の8つの価値パターンと2つの未決定を基準枠として価値パターンを同定した。同定の困難なものは暫定的に新しい価値概念を想定しながら区別して, 再度内容を吟味しながら新しいパターンをあてはめていくことを繰り返した。

1. 生き方の価値構造は表2に示した。新たに抽出した価値パターンは「イメージ自己1」(統合的自己, 理想自己が志向されている), 「イメージ自己2」(生きる意味や存在価値, 自己可能性の探求が志向されている), 「イメージ現実」(理想の時空間が志向されている), 「信仰」(信仰の精神が志向されている), 「その他」は記述が不十分, 意味不明である。人数と比率を求めた。結果, 「人間関係」が最

多であり、「自己イメージ1」が多かった。記述ではイメージ化された自己が志向されていることが特徴といえるだろう。

表2 価値構造の価値パターンと志向モード別人数と比率

志向モード	価値パターン	人数 ^{a)}	比率 ^{a)}	人数 ^{b)}	比率 ^{b)}
現実1	積極行動	5	0.03		
現実2	安楽・充足	8	0.05	13	0.08
自己1	理性	13	0.08		
自己2	努力・達成	12	0.08		
自己3	自己準拠	15	0.09	40	0.25
社会1	人間関係	31	0.19		
社会2	博愛・貢献	12	0.08		
社会3	社会規範	7	0.04	50	0.31
	イメージ自己1	21	0.13		
	イメージ自己2	8	0.05	29	0.18
	イメージ現実	9	0.06	9	0.06
	信仰	6	0.04	6	0.04
	(その他)	13	0.08	13	0.08
	計	160	1.00	160	1.00

人数^{a)}, 比率^{a)}: 価値パターン別人数と比率

人数^{b)}, 比率^{b)}: 志向モード別人数と比率

表3 職業価値の価値パターンと志向モード別人数と比率

志向モード	価値パターン	人数 ^{a)}	比率 ^{a)}	人数 ^{b)}	比率 ^{b)}
現実1	生活	28	0.18		
現実2	活動	2	0.01	30	0.19
自己1	自己形成	3	0.02		
自己2	自己規定	28	0.18		
自己3	自立	11	0.07	42	0.26
社会1	社会的帰属	13	0.08		
社会2	社会的責任	8	0.05		
社会3	社会的貢献	17	0.11	38	0.24
未決定1	探求中	5	0.03		
未決定2	未探求	11	0.07	16	0.10
	理想・願望	26	0.16	26	0.16
	(その他)	8	0.05	8	0.05
	計	160	1.00	160	1.00

人数^{a)}, 比率^{a)}: 価値パターン別人数と比率

人数^{b)}, 比率^{b)}: 志向モード別人数と比率

2. 職業的価値構造については表3に示した。新しい価値パターンとして「理想・願望」(志向モードが多面的でまとまりがある, 職業選択の願望), 「その他」である。結果, 「生活」と「自己規定」が同じ割合で, 次いで, 「理想・願望」が多かった。

栗山 容子・大井 直子
KURIYAMA, Yoko, OOI, Naoko